

令和 2 年 5 月 16 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04092

研究課題名(和文) 原発避難からの帰還地域における希望と不安の社会論理

研究課題名(英文) The socio-logic of hope and anxiety in a community that was issued an evacuation order after the Fukushima disaster

研究代表者

西阪 仰 (Nishizaka, Aug)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：80208173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：2011年の原発事故以降、全町避難を経験した地域住民への聞き取り、および同地域住民の自主的会合をビデオ収録した。それを、会話分析の手法により分析し、不安などの感情が、どのように社会的に組織されるかの一端を、明らかにした。不安を持つこと(あるいはそれを表明しないこと)の理解可能性は、人にまつわる諸概念(「若者」、「親」、「働き手」、「住民」など)間の一般的な概念結合関係に支えられている。この諸概念には、知識や責任(放射線の知識、親としての責任など)の配分が結びつく。一方、この一般的な概念結合が、そのつどの語りのなかで焦点化・挑戦を受けることにより、当該地域の不安の特殊性が構成される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

しばしば、「正しい知識」を持たずに不安を持つことが非難されるように、感情と知識の関係は感情の道徳性と深い関係にある。本研究では、具体的な相互行為において、参加者が自分たちを、あるいは他者をどう概念化するかという観点から、感情の道徳性の解明を試みた。また、概念の多様な結合関係を明らかにすることは、同時に、概念の別様の結合関係の可能性を拓くことでもある(例えば、「若い人」を「小さい子の親」との結合関係から切り離し、「定年直後の者」へと結合し直すことにより、「後継者」概念を組み替える、など)。そのような諸可能性は、これからの地域づくりのための重要な資源として活用できるかもしれない。

研究成果の概要(英文)：We videotaped interviews with 23 residents from a community that was issued an evacuation order after the Fukushima disaster as well as the monthly meetings held by some of the residents to organize various events for the local children. We used the methodology of conversation analysis to explore how emotions such as anxiety about radiation are socially organized. Individuals can only have and express (or refrain from expressing) anxiety intelligibly by drawing on the culturally provided connections between person concepts, such as “young people,” “parents,” and “local residents.” Generally expected distributions of knowledge and responsibility, such as “local residents’ knowledge about radiation” and “parents’ responsibility for their children” are bound to these concepts. By activating and defeating these general conceptual connections in the actual course of interaction, participants organize the distinctiveness and specificity of their emotions.

研究分野：社会学

キーワード：原発事故 避難からの帰還 会話分析 感情 知識 成員カテゴリー化装置 相互行為

1. 研究開始当初の背景

2011年3月の震災に続く原子力発電所の事故は、本研究開始年度である2017年においても、それにより避難を余儀なくされた10万をはるかに超える人たちの生活に、大きな翳を落としていた。自主避難を強いられている人びとについては、いくつかの報告が研究者の手により出版されていた(山下他, 2013; 山本他, 2015 など)。本研究は、原発避難のなかでも、社会学的研究があまり顧みてこなかった領域に焦点を絞った。それは、2014年に全町の「避難指示準備区域」指定が解除された地域における、人びとの日常の生活である。

研究代表者(西阪)の研究室では、2011年の原発事故以来、福島県との研究上のかかわりを続けてきた(西阪他, 2013 参照)。2015年からは、上記の、原発避難からの帰還の町において、継続的な聞き取りを行なった。全体で9回(参加住民数は計23名)、西阪自身が複数の住民から、避難当時のこと、帰還後の生活のことを聞き、すべてビデオに収録した。

この一連の聞き取りのなかで、この「帰還の町」固有の、希望と不安の交差が明らかになっている。例えば、避難のあと「若い人」たちが戻らないこと(過疎化の加速)への不安、それでも田畑を耕し続けることで次の世代へと地域を引き渡していくことへの希望が語られる。

一方、内部被ばく検査後の、来院者と医師との面談を分析するなかで、福島県内および周辺地域の住民の放射線に対する不安が、強い「道徳的秩序」(不安を持つことの道徳的正しさの秩序)のもとに構成されていることも明らかになった(西阪, 2016; Nishizaka, 2017)。

社会学の伝統において、感情は重要なトピックの1つであり続けている。しかし、感情の道徳性が、具体的な語りにおいてどのような問題となり、どう対処されるかについて、実際の相互行為の分析による経験的研究は、ほとんどなされていなかった。

2. 研究の目的

感情の道徳性は、私たちを取り巻く様々な概念の結合関係のなかにある。例えば、対象の「些細な」という特徴概念は、「心配」という感情概念と、否定的に結びつく(「些細な」ことで「心配」することは、道徳的に非難される)。あるいは、「心配」や「不安」(という感情概念)は、「知識」という概念とも深く結びつく。とくに、放射線への「不安」は、放射線に関する「正しい知識」との関係で道徳的なサンクションを受けがちである。本研究の第1の目的は、このような感情、知識にかかわる概念の結合関係を、人々の具体的な活動のなかにたどり、解きほぐしていくことにある。

さらに、概念の結合関係の解明は、H. サックスの「成員カテゴリー化装置」の研究(サックス, 1988)と深い関係がある。話し手、聞き手、および言及対象を分類するためのカテゴリーは、他の様々な概念と結合し、行為を構成するための仕掛けとして働く。例えば、部屋に入ってきた「男の子」に向かって別の「男の子」が「いま自動車の話をしていた」と言えば、「自動車の話」がステレオタイプ的に「男の子」に概念的に結びつくがゆえに、その発話は「誘い」を構成しうる(Sacks, 1992)。

どのような概念のもとで、どのように相互行為参加者空間(話し手、聞き手、言及対象)が分割されるかは、知識や責任の配分ともかわる。「男の子」と「女の子」の間に、「自動車」に関する知識がステレオタイプとして(すなわち規範的期待のレベルで)非対称的に配分されるし、「親」と「他人」の間では、「子ども」に対する責任は、ステレオタイプとして非対称的に配分される。参加者空間の編成の解明が、上の第1の目的から派生する第2の目的である。

3. 研究の方法

本研究におけるデータは、2つのコーパスからなる。1つは、上述の聞き取りである。聞き取りに際しては、複数の参加者を得て、互いにトピックを見つけながら語り「合って」もらうという形を取った。トピックが途絶えたときは、質問者の側で用意した質問によりトピックの提示を行なった。もう1つは、同じ地域における住民の自主組織における定期的会合のビデオである。月1回開催されるこの定期的会合を、2016年の末から、研究期間中、毎回ビデオに収録することができた。この会合は、地域の子どものための様々な行事を企画するための住民有志による会合である。行事にも付き添い、その様子をビデオに収録した。

ビデオデータは、すべて会話分析(西阪編訳, 2010)の手法により分析した。最初に、発話部分を詳細に書き起こし、そこから、注目する現象を含む相互行為断片を抽出した。その断片集の分析を通して、あくまでも相互行為参加者本人たちの概念の結合関係を析出した。

4. 研究成果

(1) 「不安」の合理的構成

研究背景で述べたことについて、体系的な分析を試みた。すなわち、聞き取りにおいて、「若い人が戻らない」ことに関する不安が、異なる参加者により繰り返し表明されることが、観察できる。この不安の表明はどのような概念の連結関係に支えられているのか。これがここで答えようとする問いである。次の引用は、1つの事例である。ここでは、「不安」という表現が

はっきりと用いられている (05 行目)。(書き起こしで用いられている記号については、次の URL を参照：<http://www.augnishizaka.com/transsym.htm>.)

事例 1 [2015 年 6 月: 住民 3 名; 聞き手 2 名]

- 01 住民 1: はん::: いや::: あと 年配の方戻ってきてても 若い人たちが、=
((2 行省略))
02 住民 1: =.hh[h はたして十年 (0.4) [十五年が戻ってくっかなんだか=
03 住民 2: [ん:: [[ん::
04 聞き手 1: [ん:: [ん::
05 住民 1: =[そのあいだ不安なんだよ
06 住民 2: [はん::

確かに、「若い人が戻らない」ということそのことは、地域の維持にとってそれ自体問題であるように思える。しかし、この住民 1 の発言をそのような事実にもとづく不安表明にすぎないと捉えることはできない。実際、多くの若者たちは、原発事故以前より、仕事のために近隣の都市部に住んでいたし、また、多くの若者たちが、実際に帰還して、小学校も再開されている。そればかりか、原発事故を機会に戻ってきた若者もいる。もちろん、小学生の数は、以前と比べれば大幅に減っているという事実はあるとしても、問題は、(そもそも「若い人」とは誰のことかも含め)「若い人が戻らない」という主張の実践的合理性(とにかく理解できるということ)は、どのように編成されているのか、である。

次の引用は、事例 1 の直前のやりとりである。「若い人が戻らない」2 つの理由(放射能への不安とすでに近隣都市部に家を建てていること)が述べられている。実際に、理由の接続表現(「から」)が用いられている(02 行目と 10 行目)。

事例 2 [2015 年 6 月]

- 01 住民 1: .hh やっぱりこれ <放射能ってゆう(.)
02 [不安をかかえ>ちゃった[から::,
03 聞き手 1: [はん はん はん [ええ ええ [ええ
04 住民 2: [はん
05 住民 1: みんな:-: このへんの:-: この- となりの[部落でもみ [::んな
06 住民 2: [はん:: [みんなそう.
07 聞き手 1: ええ ええ [ええ
08 住民 1: [FF((近隣の地名))とか向こう側にうち 結構
09 聞き手 1: [ん ん あ あ [建てちゃってるんですね
10 住民 1: [建てちゃってる[から::,

この 2 つの理由は、すべてのインタビューを通して繰り返し現れる。例えば、次の事例では、参加住民の 1 人が、近隣に建設予定の減容化施設(除染廃棄物も対象)のゆえに、「若くてお子さん持っている人たちとか.....向こうに移る人だって出てくるんじゃないか」と述べたのに対して、もう 1 人の住民が、それを支持する証拠として語ったことである。

事例 3 [2015 年 10 月: 住民 3 名; 聞き手 2 名]

- 01 住民 2: あ 若い: え-夫婦だったけれどね:: .hh 旦那さんはどうなんですか
02 (てえ)と=いや 郡山にこ- ああ-:の 借り上げ住宅借りて行ったり来たり
03 していますって言った[ね=.hhhhhhhhhh
04 聞き手 1: [ああ:: そうなんですね::[::
05 住民 2: [あの もう:::-:
06 (0.6) g- あの:- 僕たちみたいな: こうゆう .hhh あの:: 小さい-
07 子ども持っている:-: あれは もう (.) [ここ]には帰って
08 こ[られませんかってって はっきり言っていました[ね_
09 聞き手 1: [はん::: はん::: [ああ:::
10 ああ:::[::
11 住民 2: [何人が言っていました。

この住民 2 の発言は、実際に当事者(「若い夫婦」)に直接聞いたことの引用として語られる。いわば証言の引用となっている。それだけでなく、11 行目では、複数から得られた証言であることも明言される。ここでは、「小さい子ども」に注意したい。「若い人」と「小さい子どもの親」の概念的結合により、「若い人が戻らない」理由が、放射線と結び付けられている。「若い人」という概念は、このような概念の結合関係のなかに置かれている。すなわち、「放射線」との概念的結合がいわば暗黙裡に利用されている。

次の事例では、「若い人」が近隣の都市部に「家を建てた」ことの原因として、当該地域(帰還の町)には、仕事がないことが語られる(11~12 行目)。

事例 4 [2015 年 11 月: 住民 4 名: 聞き手 2 名]

- 01 住民 1: ¥みんな はあ 若い人たちはう[ち作って: , 向こうさ若い人たちは住=
02 聞き手 1: [なるほど. ほ- ん: ん: ん:
03 住民 1: =んでっから. ¥
04 聞き手 1: [ん:::ん
05 住民 2: [ん:ん
06 住民 1: んん
07 聞き手 1: .h まあ お仕事もね、向こう[[::: もう何年も::
08 住民 1: [ん[ん
09 住民 3: [んん だって:
10 住民 1: い[いい 便利のいいとこ[さ:行ってしまった[もの=だめだわ.
11 住民 3: [いま:: [でも- [だって、こっちには::--
12 勤めつとこねえもん.

確かに、仕事のことを持ち出したのは調査者である(07 行目)。しかし、むしろ、調査者が住民の「若い人たちは[都市部に]うち作って住んでいる」(01~03 行目)という発言を、仕事と結び付けて聞いているという事実が重要だろう。住民 3 は、09~12 行目で「こっちに勤めるところがない」ことを主張することで、調査者のこの理解を強く支持しているだけではない。「勤めるところがない」ことが、説明なしに理解できるものとして提示されている点において、ここでも、その(若者が向こうに家を建てる)理由が、その地域の固有性、つまり放射線と概念的に結びつけられている。

「若い人が戻らない」という不安の表明は、この地域住民だけでなく、(具体的にどの「若い人」について語られているかまったくわからない)「部外者」としての調査者にも、理解可能に組み立てられている。同じ「住民」であっても、「若者」は、「年配者」と対立的に用いられ、同時に「小さい子どもの親」であることと「働き手」であることに結び付けられる。このような概念の連結関係が用いられることで、不安の理解可能性は確保される。とくに、その不安は、将来地域を支える子どもの減少に向けられるものと理解可能になる。このような発言の構成(「小さい子どもの親」と「若者」が結合すること、および「[当該地域において]勤め先がないこと」が「戻らない」理由として喚起されること)において、「若い人が戻らない」という不安が、若者の都市部への流出という一般問題ではなく、なによりも放射線にもとづくものであることが合理的に構築される。同時に、そのことにより、「若い人が戻らない」ことの道徳的含意も、つまり、この発言が「年配者」からの「若者」への非難である可能性も阻却される。

(2) 知識の声と生活世界の声

研究目的で述べたように、概念の結合関係を、「成員カテゴリー化装置」と関連付けることにより、「参加者空間の分割」という考え方を得ることができる。例えば、上の事例群において、参加者空間は、「年配者」(=語り手)と「若者」(=言及対象)に分割される一方で、「住民」(=調査参加者)と「部外者」(=調査者)にも分割される。さらに、分割の一貫性がなんらかの形で維持されることが多い。例えば、一方で、参加者空間が「年配者」と「若者」とに分割される時、他方で、「小さい子どもの親」と「働き手」は「若者」の側に一貫して振り分けられる。以下では、1つの事例を紹介することで、この分割自体が、相互行為上の問題となりうることを示したい。

上記の住民の会合に、官公庁の 4 名の職員の訪問があったときのやりとりである。この一連のやりとりにおいて、参加者空間の分割に順次変更が加えられていく。事例 5-1 では、山登りの企画に関する学校の説明会で、保護者から放射線についての質問はなかったという住民らの報告に対し、職員の 1 人が質問を行なっている。

事例 5-1 [2017 年 6 月: 住民会合: 官公庁職員 4 名参加]

- 01 職員 2: >すいません< m-もつと突っ込んで >はな(h)したい-話したいと思うん
02 ですけど< .h (それって) その父兄の方が:放射せんでゆうものを
03 <知って> 怖がってないのか >それとも< もともと .h >ぜんぜ-<
04 あっても それを気にしていい
05 ? : [GHh GHh ((咳払い))
07 住民 1: 'や 気にはしてつとお!もうよ_

この職員の質問は、いくつかのことを設定している。1) 放射線を「気にしない」として知識の有無を結びつけている。2) ここにいる住民組織の「会員」たちを、「父兄」の知識について評価できる立場に、つまり、「父兄」のことを知るだけでなく、放射線について正しい知識を持つ立場に置いている。こうして、会員と「父兄」(他の住民)の間に分割線が入れられる。それに対して、住民 1 は、「父兄」の感情を推測(「と思う」)により語ることで、この分割線を受け入れると同時に、職員 2 の質問の前提を否定する。しかし、続いて、別の住民が、「気にしている」として、「保護者」が放射線のことを尋ねないこととの間の潜在的矛盾を、次のように説明するとき、「保護者」と自分たちを、明確に、同じ「住民」として設定する(04 行

目). また, 住民 2 は, 推測として語っていない(「終わった」01 行目) 点も注意したい.

事例 5-2 [2017 年 6 月]

- 01 住民 2: もちろん 気にす る 時期は終わつ:: た
02 住民 1: ただ はん:: はん 終わった はん はん はん:: はん
03 職員 2: ああ なるほ だ
04 住民 2: じゅう民として

このように, 職員の側から提出された最初の分割(会員と他の住民の分割)は, 無効にされる. さらに, 住民 2 が現在の地域住民の状況を, 「放射能と生活するうえで付き合っていかなければならない」(01~02 行目) と特徴付けるのに対して, 職員 2 は, 同意を示す(07 行目).

事例 5-3 [2017 年 6 月]

- 01 住民 2: .hh (0.4) せ(h)いか(h)つする う-上では付き合っていかなきゃ
02 いけ ない部分なの ↑で: ↑:
03 職員 2: はん:: はん はん: はん
04 住民 3: はん:: はん
05 住民 4: °°はん::°°
06 住民 2: ↑ね ((住民 1 を見る))
07 職員 2: >そうなん'す< もともと あるん:で で'すね
08 住民 1: はん<す はん:: ↑:
09 職員 2: はん k- そこが:あの::
10 わかってないひと(h):が(h)::いて

09~10 行目で, 職員 2 が「わかっていない人」の存在に言及することで, 正しい知識の有無による, 参加者空間の分割がなされ, かつ住民たちの感情(気にしないこと)は道徳的に正当化される. 一方, 職員 2 の同意(「そうなんです」)は, 知識の正しさの評価という形式を取っている. つまり, 「正しい知識」は, その正確さもしくは量によって階層化できるような知識としても位置付けられる. 実際, 職員 2 の評価的発言には, より知識を持つ者の側からの(誰をどちらに分類するかに関する)分割権限の主張が含意されているようにみえる.

この新たな分割にもとづいて, 一般論として, 職員により, 知識を持たずに心配することに対して, 道徳的非難を含意する発言がなされたあと, 事例 5-1 と 5-3 における発言と同様の発言が, 住民からなされる.

事例 5-4 [2017 年 6 月]

- 01 住民 2: ま:: たく心配してないってゆうのは う-う↑:そ だよね.
(10 行省略)
02 住民 2: ただそれ- とはど- ねえ? >どうしても<, (0.2) ¥付き
03 合って¥ いかな(h)いことには生活もでき(h)ねえし::

同様の表現により同様の発言が繰り返されることのうちには, その発言がきちんと理解されていなかったという含意があるだろう. ここには, 知識を持つ者と持たない者の分割と, この地域で生活する者との(知識しか持たない)者の(生活世界と知識の)分割が拮抗している. 重要なことは, 官公庁職員の無理解を非難することではない(かれらは, かれらの役割をむしろ果たしているといえる). 逆に, 私たちが地域の人びとをとくによく理解できているかのようふりをしたいわけでもない. 様々な概念の結合関係を用いて発言が組み立てられるなかで, この地域で生活する人たちの日常生活の特殊性が, まさに特殊なものとして, 一般的な形で理解可能になるということ, このことが最も重要なことである. 発言の理解可能性のために, アイデンティティ(何者か)に関する概念と, 知識や感情に関する概念との複雑な結合関係が, 取捨されながら利用される. 一方, 通常であれば, 放射線に関する知識の程度と放射線に関する不安の程度とが(反比例的に)結びつけられるところで, 「生活世界の声」(Mishler, 1984)は, あえてその結合関係を断ち切ることによって, 「声」となる. しかし, この声が聞き届けられるのは, やはり, そのような(あえて断ち切るという)形で, 概念の結合関係が利用されているからでもある.

< 引用文献 >

Mishler. 1984. *The discourse of medicine*. Norwood: Ablex / 西阪. 2016. 知識と心配の道徳性. 岩上他編著『変容する社会と社会学』学文社 / Nishizaka, 2017. The moral construction of worry about radiation exposure. *Discourse & Society* / 西阪編訳. 2010. 『会話分析基本論集』世界思想社 / 西阪他. 2013. 『共感の技法』勁草書房 / サックス, 1988. 「会話データの利用可能性」北澤・西阪編訳『日常性の解剖学』マルジュ社 / Sacks, 1992. *Lectures on conversation*. Blackwell / 山下他. 2013. 『人間なき復興』明石書店 / 山本他. 2015. 『原発避難者の声を聞く』岩波書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Aug Nishizaka	4. 巻 1
2. 論文標題 Guided Touch: Sequential Organization of Feeling a Fetus at Japanese Midwifery Practices	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 A. Cekaite & L. Mondada (Eds.), Touching Moments	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aug Nishizaka	4. 巻 3
2. 論文標題 Multi-Sensory Perception during Palpation in Japanese Midwifery Practice	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Social Interaction: Video-Based Studies of Human Sociality	6. 最初と最後の頁 Online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/[not yet assigned]	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nishizaka Aug	4. 巻 53
2. 論文標題 Appearance and Action: The Sequential Organization of Instructions in Japanese Calligraphy Lessons	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Research on Language and Social Interaction	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1080/08351813.2020.1739428	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西阪 仰	4. 巻 53
2. 論文標題 会話分析トレーニング・セッション	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 46-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aug Nishizaka	4. 巻 1
2. 論文標題 Postscript: Thing and space	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Dennis Day and Johanness Wagner (eds.), Objects, Bodies and Work Practice	6. 最初と最後の頁 285-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西阪仰	4. 巻 1
2. 論文標題 会話分析はどこへ向かうのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編『会話分析の広がり』	6. 最初と最後の頁 253-279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須永将史	4. 巻 15
2. 論文標題 身体接触を伴うケア実践における性別の話題化はどのようになされているのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福祉社会学研究	6. 最初と最後の頁 241-263
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satomi Kuroshima	4. 巻 1
2. 論文標題 Evidencing the experience of seeing: A case of medical reasoning in surgical operation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Co-operative engagements of intertwined semiosis: Essays in honor of Charles Goodwin	6. 最初と最後の頁 208-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早野薫	4. 巻 1
2. 論文標題 認知的テリトリー：知識・経験の区分と会話の組織	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編『会話分析の広がり』	6. 最初と最後の頁 193-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早野薫	4. 巻 20
2. 論文標題 レヴィンソンが牽引するインタラクション研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 語用論研究	6. 最初と最後の頁 160-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aug Nishizaka	4. 巻 28
2. 論文標題 The moral construction of worry about radiation exposure: Emotion, knowledge, and tests	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Discourse & Society	6. 最初と最後の頁 635 ~ 656
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0957926517721081	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 The ascribability of action in interaction: Revisiting the status/stance distinction
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima & Tomone Komiya
2. 発表標題 Cross-Cutting Preference of the Evaluation of Radioactive Dose: Local Epistemology and Moral Accountability
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima & Tomone Komiya
2. 発表標題 Members' Evaluation Methods for Measuring Radioactive Dose
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 The differentially ascribable nature of seeing: Projects and visual perception
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomone Komiya & Aug Nishizaka
2. 発表標題 Accomplishing the Intelligibility of the Distinctiveness of Activity
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 Perception that matters in interaction
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis 2018 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 Mixed perceptions in instructional settings: seeing under the aspect of proprioception relevant to the current activity
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Aug Nishizaka
2. 発表標題 Seeing how it is done: The sequential organization of instructional actions in a Japanese calligraphy lesson
3. 学会等名 EARLI SIG 14 Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masafumi Sunaga
2. 発表標題 Walking while noticing: How is interaction organised through the negotiation of concerns while inspecting a hiking course?
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima
2. 発表標題 Perception in the Work of Identification of Human Anatomy: A Case of Medical Reasoning in Surgical Operations
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima; Tomone Komiya
2. 発表標題 On Accounting for Concerns: Members' Methods for Measuring Radioactive Dose
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hayano, Kaoru
2. 発表標題 Distress in the past and present: The use of past tense as a resource to resist troubles
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西阪 仰
2. 発表標題 心配と安心の道徳的構成 感情・知識・検査
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomone Komiya, Aug Nishizaka
2. 発表標題 Invisible and visible dangers: Locally achieved conceptual connections
3. 学会等名 the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima, Natsuho Iwata, Masafumi Sunaga
2. 発表標題 Practices for informing and receiving internal exposure test results: Normalization of inferable results
3. 学会等名 the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima
2. 発表標題 Inferred Emotions: Representing Perspectives in a Group Meeting
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satomi Kuroshima
2. 発表標題 Explaining test results: Practices for demonstrating the interpretation of measurement data
3. 学会等名 American Sociological Association
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小宮 友根 (Komiya Tomone) (40714001)	東北学院大学・経済学部・准教授 (31302)	
研究分担者	須永 将史 (Sunaga Masafumi) (90783457)	立教大学・社会学部・助教 (32686)	
研究分担者	黒嶋 智美 (Kuroshima Satomi) (50714002)	玉川大学・ELFセンター・助教 (32639)	
研究協力者	高木 竜輔 (Takaki Ryosuke) (30512157)	尚綱学院大学・総合人間科学系・准教授 (31311)	
研究協力者	小室 允人 (Komuro Masato) (12501)	千葉大学・人文社会科学研究科・博士後期課程在学 (12501)	
連携研究者	早野 薫 (Hayano Kaoru) (20647143)	日本女子大学・文学部・准教授 (32670)	
連携研究者	岩田 夏穂 (Iwata Natsuho) (70536656)	東京大学・大学院工学系研究科・特任准教授 (12601)	